



コメント

高田 研さん（公害資料館ネットワーク代表幹事、都留文科大学特任教授）

大学生をたくさん連れて、2018年に新潟で聞き書きの調査をさせていただきました。次の世代に公害の問題を考えてもらうということで、非常に大きな成果を得ました。

今年になって、聞き書きをさせていただいたお二人が他界されました。もう聞けなくなってしまい、貴重な我々の財産になったのではないかと思います。

同年に文科省のドイツとの青少年の交流事業で25人ほどの大学生を連れて行きました。ベルリンの郊外にある非常に綺麗なユースホステルで議論したのですが、かつてこの場所は女性専用のユダヤ人収容所の官舎だった場所でした。その横に収容所も保存されており、ここで民主主義のあり方を議論しました。ドイツが戦争に突き進んだ原点に、民主主義がどんどん失われていったというプロセスがある。ここを若者たちに学ばせなければという強いドイツ側の思いがありました。しかし、残念ながら日本の大学生からは民主主義というキーワードではなかなか言葉が出てこない。そういう経験を2週間ばかりさせていただきました。

考えてみると、現象面は公害や自然破壊の問題ですが、公害教育は私たちが何をきちんと考え政治的に発言していくか、という教育をすることではないでしょうか。SDGsの17番目の目標（パートナーシップで目標を達成しよう）は、市民がどう連携して、それをやっていくのかに最終的につながっていくのではないかと考えています。

来年、長崎でフォーラムを開催できることを、本当に心待ちにしています。



閉会あいさつ

下田 守さん（公害資料館連携フォーラム in 長崎実行委員、下関市立大学名誉教授）

なぜ公害資料館ネットワークのフォーラムを長崎で開催するのかと違和感をお持ちの方がいるかもしれません。私は主にカネミ油症について調べてきました。油症の被害者は長崎県に多いですが、長崎だけでなく福岡など西日本を中心に各地にいます。

長崎といえば原爆・平和がまず浮かび、公害とは違うと受け取られやすいですが、原爆症は人間についての健康被害として四大公害などの公害と共通する面があると思います。水俣病、油症、原爆症などの大規模健康被害は、いずれも非常に長期にわたる難病であり、各段階で未知の経験であることが多く、診断も治療も難しく、認定や差別などいろいろな問題が出てきます。このように公害と原爆症にはいろいろな共通する面があり、薬害その他の大規模健康被害とのつながりも出てくるのではないかと思います。

長崎は日本の中でとてもユニークな所だと思います。簡単に言うと、歴史と空間が交わる場所です。地理的にも世界と日本、歴史的にも過去と現在をつなぐ所と言えるでしょう。さまざまな人や物、考えがここに来てぶつかり、ここを経由してどこかに行く。そのまま通り過ぎるだけでなく、そこで何らかの反応が生まれる。要するに、異質なものに触れ、新しい気づきができ、またよそにいく、そういう所ではないかと思います。

今回のパネル展のタイトル「影、光る」は、今まで気づけなかったことに光を当てるという意味も含むと思います。公害から原爆などに、あるいは原爆や平和から公害に、今まで気づけなかったことに光を当てていく。そこで何か起これば新たな光を灯す、そんなきっかけになればと思います。

今日のトークのようにいろいろなテーマがぶつかるというところが一番面白いと実感しています。ぜひ来年に向けての議論にご参加いただければと思います。

〔参加者の感想〕 アンケートから一部抜粋して紹介します。

公害と戦争はつながっているという指摘。以前、公害患者会の方がそのように話されるのを伺って以来、強く心に残っています。

長崎で次回フォーラムが開かれることの意味がだんだん分かってきて、非常に楽しみになりました。

公害は高度成長の影として語られることが多いが、実は戦争以前からあったということ、敗戦後の復興ともつながって起きたものであるという歴史的な解釈。

また、国は、国内で戦争の被害を受けた市民（空襲被害者など）に受忍を押し付けてきましたが、国や企業の責任という点において、公害も戦争も戦後社会の在り方を問いただしているという視点にはっとさせられました。

当日の様子は、公害資料館ネットワークのYouTubeチャンネルで一部公開しています。ぜひご覧ください。

<https://www.youtube.com/channel/UCOmbwU2iYUfM7kPZy8zwp1Q>



パネル展示「影、光る — 全国公害資料館からのメッセージ — 」

期間：2020年12月1日(火)～12月25日(金)

ナガサキピースミュージアムを会場に、公害資料館共通パネル7枚をはじめ、各地の公害資料館の紹介パネルを計21枚展示しました。パネルのほかにカネミ油症事件など、九州の公害に関する書籍10冊も展示しました。期間中には115名の方が訪れました。

◆長崎実行委員の書棚から“九州×公害”を知る本

- 〈カネミ油症〉カネミ油症事件50年記念誌編さん会議『カネミ油症事件50年記念誌』五島市、2020
- 〈カネミ油症〉『河野裕昭写真報告 カネミ油症』西日本新聞社、1976
- 〈カネミ油症〉矢野トヨコ追悼文集刊行会『矢野トヨコかく生きたり — あるカネミ油症被害者の歩み』アットワークス、2010
- 〈対馬イタイイタイ病〉西木暉『対馬への旅 — 罪なきこととけして言うまじ』合同フォレスト、2016
- 〈水俣病、じん肺等の訴訟に関わった弁護士〉阪口由美『たたい続けるということ — 馬奈木昭雄聞き書き』西日本新聞社、2012
- 〈豊前火力発電所建設反対運動〉松下竜一『暗闇に耐える思想 — 松下竜一講演録』花乱社、2012
- 〈「蜂の巣城」をつくって下釜ダム建設に反対した室原知幸の評伝〉松下竜一『砦に拠る』筑摩書房、1977
- 〈水俣病〉塩田武史『僕が写した愛しい水俣』岩波書店、2008
- 〈宮崎県・土呂久ヒ素公害〉川原一之『土呂久羅漢』影書房、1994
- 〈九州の住民運動〉村田久遺稿集編集委員会編『響きあう運動づくりを — 村田久遺稿集』海鳥社、2014

